

# ASD の疑いのある児童のプランニングを促す支援の実践報告

— 漢字書字の指導場面における解決方略を用いた支援アプローチを通して —

○澤田 祐輝<sup>1</sup>

中島 範子<sup>2</sup>

岡崎 慎治<sup>3</sup>

（筑波大学人間総合科学学術院<sup>1</sup>）

（筑波大学 DAC センター<sup>2</sup>）

（筑波大学人間系<sup>3</sup>）

KEY WORDS: 心理教育的アセスメント プランニング 漢字書字

## 【目的】

発達障害のある子どもにおいて、認知機能の偏りと遅れが想定されており、多くの支援方法が検討され続けている。特に、プランニングを促進する支援アプローチは国外において多く報告されてきた（Cormier, Carlson, & Das, 1990; Kar, Dash, Das, & Carlson, 1993; Naglieri and Gottling, 1995）。宮嶋・菅原・中野・岡崎(2018)は、プランニングを促進する支援アプローチに関する先行研究では、子どもに課題や教科の内容を直接的に教えることよりもプランニングのプロセスを促進することが有効であるという仮説に基づいて、方略の価値に気づかせ、方略の言語化が必要とされているということを指摘している。

そこで、本研究では、ASD の疑いがあり漢字書字に困難を示す児童に対して、漢字書字の指導場面における解決方略シートを用いてプランニングを促す支援の有効性について検討することを目的とした。

## 【方法】

**対象児** ASD の可能性があるとして、公立小学校特別支援学級に在籍し、B 大学の教育相談を利用する児童 1 名（A 児）を対象とした。A 児の WISC-IV 知能検査（8 歳 6 か月時）の結果は、全検査 IQ118（90%信頼区間、以下同：112-122）、言語理解指標 155（142-156）、知覚推理指標 95（88-103）、ワーキングメモリー指標 106（99-112）、処理速度指標 94（87-103）であった。また、9 歳 4 ヶ月時に実施した DN-CAS 認知評価システムの結果は、全検査標準得点 94（90%信頼区間、以下同：89-100）、プランニング 108（99-115）、注意 89（82-99）、同時処理 91（85-99）、継次処理 94（87-102）であった。A 児の困難の 1 つは、漢字の書き取りであり、書字自体に強い心理的な抵抗感がみられた。一方で、行動観察と保護者及び A 児への聞き取りから、漢字の読みに関して、自信を持っていることが確認できた。また、A 児は、理科や科学の話題に対する興味・関心が非常に高いことも報告されていた。

**倫理的配慮** A 児の保護者に対して、研究目的によるデータの収集と使用について承諾を得ている。

**支援の方向性** A 児は、DN-CAS 認知評価システムにおける「プランニング」の高さから、解決すべき課題に対して状況を理解することや方略を考えて振り返ることの得意さが想定された一方、日々の生活や学習場面では「注意」の低さが、物事の忘れっぽさ、聞き取りミス、単語の識別の不正確さなどといった形で現れ、十分なパフォーマンスを発揮することができていないと推察された。また、WISC-IV 知能検査の言語理解指標の高さから、言葉を用いて思考する能力の強さに特徴がみられた。以上を踏まえて、支援場面では、課題を解決するための計画立てや課題遂行後に言葉を用いて振り返ることが有効であると考えられた。従って、支援の目標は「解決方略を用いて漢字の書字に取り組めるようにする」と設定した。

**実施期間及び場所** 202X 年 10 月から翌年 1 月にかけて、B 大学における月 1 回の教育相談（60 分）において支援を実施した。そのうち、当該支援の実施は、1 回あたり 20 分程度だった。全 4 回実施した。

## 支援の実践及び方法

支援場面では、漢字の読み書きの教材と「解決方略ワークシート（以下、方略シート）」を作成して使用した。毎回のセッションの冒頭では、その時間の学習課題について、方略シートを用いて、「問題の種類」、「解けそうな問題数」、「課題解決に要する時間」、「使用できそうな解決方略」を著者との対話の中で導出し、計画立てを行った。

課題遂行後は、その都度、事前に想定した方略が有効だったかなどを対話的に振り返り、著者がその場でコメントを付けて A 児にフィードバックをした。また、A 児は、漢字の読みが非常に得意であり、科学的な事象への興味関心が高いという実態を踏まえ、問題の一部に、A 児が興味を持つような生物の名前などについて、漢字検定 1 級相当の問題から選定したものを含めた。漢字の書字に関しては、当該学年相当～2 学年下の漢字から、A 児の興味関心に可能な限り沿ったものを選定して問題を作成した。あわせて漢字の書きに対する心理的な抵抗感の軽減のため、1 回の指導場面で取り組む問題数は 5 問までに設定した。また、WISC-IV の知覚推理指標や処理速度指標の結果を踏まえ、漢字書字に用いるプリントのマス目を拡大し、マス目を 4 つの象限ごとにそれぞれ別の色で分けた。

## 【結果】

A 児は、全 4 回の支援場面のすべてにおいて、方略シートを使用した。A 児が方略シートに上手く書字できず、口頭で方略について説明を求める場面も多々みられた。また、支援の回数を重ねるごとに、A 児は、課題に対して解決のための方略を方略シートで計画することが円滑に行えるようになった。また、漢字の読み書きで用いた問題は、A 児の興味関心に合わせたことなどにより、熱心に取り組む様子がみられた。特に、漢字の書字に対しては、心理的な抵抗を示す言動が減り、書けるようになった漢字を問題以外の機会にも積極的に使用する様子もみられた。

## 【考察】

本研究では、ASD の疑いがあり漢字書字に困難を示す児童に対して、漢字書字の指導場面における解決方略シートを用いてプランニングを促す支援の有効性について検討することを目指した。

結果的に、A 児は、方略シートを用いて、言語的に方略の選択と振り返りを行うことを通じて、漢字の書字に取り組むことができた。これは、A 児が有するプランニング能力や言語能力の強さを漢字の書字場面に生かすことができたためだと考えられる。また、漢字の書字の心理的な抵抗感を示す言動が軽減され、扱った漢字を課題外でも積極的に使用する様子がみられたことから、A 児の漢字書字の自己効力感が高まった可能性が示唆された。

## 【主要文献】

宮嶋友香理・菅原恵理・中野泰伺・岡崎慎治（2018）漢字の習得に困難のある小学校 3 年生への漢字の指導の検討：プランニングを促進する指導の実践。筑波大学特別支援教育研究, 12, 39-49.  
(SAWADA Yuuki, NAKASHIMA Noriko, OKAZAKI Shinji)